

## 地域における対話型防災ゲームの意義とは何か？～クロスロードを通じて～ Yes or No or More? The Meaning of Disaster Prevention Education Game

○李 勇昕・矢守克也

○Fuhsing LEE, Katsuya Yamori

Recently, disaster prevention education started to make an effort on empowerment of community. Experts teach people not only science knowledge, but also the features of community. Experts use the workshop approach to make people learn disaster prevention together rather than the one way direction approach. However, there is a problem that how to discuss the achievement of workshop. In this study, we held the “Crossroad” workshop which conducted in Oarai elementary school and Ihige junior high school in Ibaraki prefecture. We focused on the conversation with the teachers and students. In those workshop, students created their own “Crossroad” and talked the issues of community and disaster with each other. They expressed their emotion when they confront the disaster. We found sometimes, the teachers used the top down way to ask students “choose the right answer” unconsciously.

### 1. はじめに

近年、住民主体の防災教育が提唱されてきた。住民の防災力を向上させるために、防災教育の内容は災害のメカニズム、災害対応といった汎用的な知識だけではなく、住民、地域の特性に合わせた防災教育の実施が重視されてきた(矢守・諏訪・船木, 2007)。その中で、これまで専門家、行政、学校が送り手として一方向の知識を受け手の住民、学生に教える形にとどまらず、送り手と受け手が一体化し、刺激しあうワークショップの手法が導入されてきた(村山, 2011)。参加者のワークショップの事後アンケートからこれらのワークショップに対する評価をみると、住民の地域防災に対する認識度およびワークショップへの満足度は多くの場合高いことがわかった。しかし、このような参加者側だけの数量的な評価のみを過剰に重視してしまうと、送り手と受け手の関係性の変化や参加者の防災教育に対する受容の変化も見えなくなってしまう。

本研究は、防災ワークショップの意味を考察するために、筆者がこれまで地域で実施されてきた対話型ワークショップ「クロスロード」のエスノグラフィーを通じて、ワークショップの送り手と受け手がどのようにインタラクションしてきたか、どのような対話が生まれたのかに着目する。

### 2. 「クロスロード」とは

「クロスロード」(crossroad)とは、「岐路」、「分かれ道」のことで、そこから転じて、重要な決断をしなければならない事態を示す。このゲームは、

災害時のさまざまな局面で経験される「こちらを立てればあちらが立たず」といった場面を素材に作成された、カードを用いたゲーム形式による防災教育教材である(吉川・杉浦・矢守, 2009)。「クロスロード」の神戸編・一般編は、阪神淡路大震災の際、神戸市職員が実際に迫られた難しい判断状況に基づき作成された。具体的な設問は「愛犬を避難所まで連れていくか」、「人数分用意できない緊急食料をそれでも配るか」などである。ゲームの参加者は、これらの設問に対し、「Yes」か「No」を表明した上で、その理由を述べる。また、これらの設問は、「正解がない」ことが特徴である。

東日本大震災以降、筆者が被災地茨城県大洗町で2年以上の間、地域住民を当事者として、「クロスロード」を体験してもらうだけではなく、自分の震災体験を活用して、「自分でクロスロードをつくる」手法を提案した。2014年、大洗町の住民、役場の職員、旅館業者、漁師などが「クロスロード:大洗編」という防災教材を作成した。「大洗編」を通じて、被災地の問題を現地で語りあい、各自の悩み、葛藤、弱さを地域で共有した。このアプローチは、いつも防災教育の「受け手」として見られる住民が、同時に自分の反省と教訓を教材にし、「送り手」にもなっている。

### 3. クロスロードの実施状況

「クロスロード:大洗編」が完成して以来、筆者が大洗町小学校、茨城県常総市石下中学校の授業で「自分でクロスロードをつくる」ワークショップ手法を実施した。



図 大洗小学校の5年生の自作クロスロード

まず、大洗小学校の実施状況を紹介します。筆者は2015年大洗小学校で、5年生の1クラスに2回の防災ワークショップの形で授業を実施した(2015年7月10日と11月27日)。1回目の授業では「クロスロード」を実施した。生徒に津波避難に関する設問を議論してもらった。2回目の授業では、「自分でクロスロードをつくる」手法を導入した。授業の前半ではグループに分けて合計5間の設問を作った。授業の後半では、グループの代表1人がクラス全員に向かって設問を発表し(図参照)、皆にYESかNOの答えを聞いて、その理由も聞く。設問内容は、下記のように整理できる。①マリントワーの施設長、②ライフセーバー、③バスのドライバーとして、津波が来た際に、お客さんを優先避難させるのか、先に逃げるのか。④町長として、深夜2時に津波が来た。先に逃げるのか、役場に行って全町に避難の放送するのか。震災直後の設問もある。⑤スーパーの店員さんとして、震災の後、水の購入はお客さんを優先にするのか、自分の分を確保するのか。

興味深いのは、これまでの「大洗編」は、主に大人の当事者が自分自身の震災体験をベースにして設問を作ったため、クロスロードの「あなたは○○」という設定は、自分自身の立場にしたことが多かった。それに比べて、今回の事例では、「あなたは小学生」という設定がなく、大洗町で実際に存在している大人の職業である。言い換えれば、小学生にとって、これらの町を守ってくれる存在に対し、憧れている一方、防災は自分ではなく、町にいる大人の任務として考えている側面もある。

また、「あなたはスーパーの店員」の設問では、クラスの中で、ただ1人が水をお客に売らないとの答えを選択した。この生徒Aに理由を聞こうとしたら、本人は沈黙した。担任の教員はもう一度、

Aに「どうして水を渡さないの」と声を荒げて聞いた。Aは何も答えられなかった。Aは責められていると感じた筆者が、「正解がないのですから...わかりました。大丈夫ですよ。」と次の話題に進んだ。しかし、その後、筆者は水を渡さない理由についてAの言葉をゆっくり引き出すべきだったのではないかと反省した。

もう一つの事例は、2016年9月1日、常総市石下中学校の防災訓練日で、2年生の1クラスに実施した「クロスロード」である。本授業では、前半は常総市の水害版の「クロスロード」を実施し、後半は生徒1人1問の形で設問を作ってもらった。ある設問を作れない生徒Bに、筆者が声をかけた。筆者がBに、「あなたは中学生。あなたは学校の先生。あなたは消防団員。あなたは野球選手。あなたは市長」など、いろんな設定を提示した。Bは、「わかったわかった。野球選手がいいね」と言った。しかし、筆者は野球選手と災害とは関係なさそうと少し心配していた。その後、作られた設問は「あなたは野球選手。明日は甲子園の決勝戦。しかし実家は水害の被災地になったという情報が来た。あなたは試合に出る？出ない」。Bは、「自分が出ない、その理由は地元のことを心配しているから、野球どころではない」と話した。また、Bが野球部のクラスメイトCの理由を聞きたいとCを指名した。Cは出ると選び、その理由は、「地元を元気づけたいから」。実際、石下中学校は、常総水害によって、グラウンドが破壊された。本来県大会でいつも上位の野球部が活動中止になった。野球だけではなく、生徒は修学旅行、部活、さまざまな課外活動がやむを得ずに中止になった。生徒は、被災の実体験(部活をやめた)と自分の理想(甲子園に出る)との矛盾を「クロスロード」で表現できたと考えられる。

#### 4. 結論

このようなワークショップ形式の授業を通じて、生徒は災害と地域における矛盾を表現し、主体的に判断する能力を身につけたと考えられる。また、教育者が無意識的に生徒の発言の機会を奪ってしまい、トップダウンの関係性になった課題がある。

#### 【引用文献】

- 吉川肇子・杉浦淳吉・矢守克也(2009)クロスロード・ネクストー続:ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション,ナカニシヤ  
村山良之(2011)地域の特性をふまえた防災ワークショップの実践,今村文彦編 防災教育の展開 pp.73-114,東信堂  
矢守克也・諏訪清二・船木伸江(2007)夢みる防災教育,晃洋書房